

原著論文

## 熹平石経残石と漢碑の字形比較考

瀬筒 寛之\*

(二〇一九年十月二十一日 受理)

A Comparative Study of the Character Form on the Muping Stone Scriptures and the

Han Stone Monument

SEZUTSU Hiroyuki

## 要約

熹平石経は、後漢熹平四年（一七五年）、儒学經典を校定し、七〇余に刻石したものである。熹平石経は、当時の正体の隷書で書かれ、書道史、書体史においても価値の高いものであるが、原石は散逸して残石や搨本が収蔵されている。本稿では、正体的隷書で書かれた熹平石経およびそれと同時期、同地域（近隣地域）に建碑された乙瑛碑、礼器碑、曹全碑、張遷碑の字形を比較検討し、隷書の代表的古典と尊称されるこれら四碑の価値を、筆意のみならず正体の視点からも確認することを目的とした。その結果、熹平石経残石と乙瑛碑との字体・書風の共通点を見出した。また、熹平石経残石の字体

が、金文や小篆の正統を汲む字体によって書かれている字例を掲出した。一方、熹平石経以後に建てられた曹全碑や張遷碑には、簡略な字体と考えられる形状に書かれている字例も見られた。熹平石経残石の字体に、それよりも先に書かれた乙瑛碑や礼器碑との共通点が比較的多く見られる点については、政治的、文化的交流の面にも目を向ける必要がある。

キーワード：熹平石経、隷書、八分、漢碑、正体

## はじめに

熹平石経は、後漢熹平四年（一七五年）、靈帝の勅許を得て『書経』『詩経』『易経』『儀礼』『公羊伝』『論語』を校定後、四十八石に刻され、河南省洛陽の太学門外に設置された。春秋戦国期に成立した儒学の經典は、経年や秦代の焚書坑儒によって散逸したため、古来の原文を回復させ、後学の益となるよう刻石されたものである。碑文は、漢代の正書体の隷書で書かれており、後の正始石経（三体石経）に対して一字石経また今字石経とも称される。筆者については、『後漢書』蔡邕伝に、儒学經典の校定・刻石を奏請した、議郎の蔡邕によって書かれたものと伝えられている。熹平石経の原石は、長年の間に戦火災害等に遭遇して破損、離散してしまい、宋代になつて残石となったものが偶然出土した。一九二二年以降、太学の旧址からも出土し、その数は数百余石にも達する。それらは、徐森玉、馬衡、羅振玉、于右任等の個人および北京図書館によって分別され収蔵されてきた。このように、熹平石経で現在見ることができ

<sup>1</sup> 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 講師。

は、大きさも不揃いの残石や拓本であるが、文献や文字の歴史において高い価値を有する。熹平石経残石の数は日本にも舶来し、台東区立書道博物館、藤井有鄰館に所蔵されている。

中国においては、時代や地域の違いによる字体の違いが生じたため、秦の始皇帝による文字統一（小篆の制定）を嚆矢として、時折漢字の正体、標準を求める動きが行われてきた。篆書、隸書、楷書はそれぞれ、各時代における正書体の地位を得た書体である。これらの書体の正体や重要經典の正文を示す史料には次のようなものがある。

書体		正体や正文を示す碑石・字書	刻年
小篆	泰山刻石	前二一九年	
	瑯琊台刻石	前二〇九年	
隸書（八分）	熹平石経	一七五年	
	正始（三体）石経	二四〇年	
楷書	干祿字書	七〇〇年	
	開成石経	八三三年	
	康熙字典	一七一六年	

石経については、本文の正しさを示すことを主眼としながら、文字の字体としても当時における正体、標準をも示すものであったと考えられる。

小篆は、初めて広大な中国全土の字体の統一を図り正体と文字使用の標準を制定した、最も権威性の高いものであったろう。始皇帝の指示を受けた李斯によって秦の大篆を基に制定された。小篆の均一な太さで左右対称を基本とする厳肅な造形美は、現代においても色褪せない。現存する泰山刻石に残された字数はわずか十字、その拓本には、建碑当時の字数二二三字から減じて一六五字本、五三字

本、二九字本などが伝えられている。一方、隸書や楷書の正体を示す上表の碑石は、中国の重要經典の正しい文章を記す内容上の価値に比して、文字の書法については、謹厳でよく整っているが、刻石されると筆意が失われて形骸化し、堅苦しく精彩に乏しいとの評もある。しかしながら、字体史・書体史の観点から、当時の正体を示しているという価値も看過できないものである。今回、当時の正体の隸書字形を示す熹平石経残碑の文字と、同時代に建碑された乙瑛碑、礼器碑、曹全碑、張遷碑の四碑の字形とを比較検討し、共通点や相違点について考察することは、隸書の代表的古典と尊称されるそれら四碑の価値を、筆意のみならず正体の視点からも確認するという点に意義がある。

一 熹平石経残石字形との比較対象

熹平石経は、後漢の熹平四年（一七五年）の刻石で、字形は八分である。本稿では、熹平石経残石との字形比較対象として、次表のとおり、同時期の立碑でかつ書体が八分の漢碑四種を挙げた。各碑の概略を述べる。

碑石	刻年	もとの設置場所	現存する場所
乙瑛碑	一五三年	山東省曲阜孔子廟	山東省曲阜孔廟東廡
礼器碑	一五六年	山東省曲阜孔子廟	山東省曲阜孔廟東廡
熹平石経	一七五年	河南省洛陽太学門外	(各地に残石・搨本)
曹全碑	一八五年	陕西省郃陽県	西安碑林
張遷碑	一八六年	山東東平県明倫堂前	山東泰安岱廟東廡

乙瑛碑の全称は「漢魯相乙瑛請置百石卒史碑」である。後漢の永

興元年（一五三年）の刻。碑末楷書題記に「後漢鍾太尉書」とあつて鍾繇の書と伝えられるが、諸家によつて否定されている。書法は「骨肉均適、情文流暢」（翁覃溪）、また「非溢美」「肅穆（静まりかえる）之氣自在」（楊守敬）などと評される<sup>1</sup>。結構が大きく、波磔は重厚でよく引き締まり、素朴感を漂わせている。字形は整つて緊張感がある。

礼器碑の全称は「漢魯相韓勅造孔廟礼器碑」である。後漢・永寿三年（一五六）の刻。書法は、「字画之妙、古雅無前」（郭宗昌）、「兼之（性情・形質）者惟推此碑」（楊守敬）などと評される<sup>2</sup>。整齐でゆつたりした字形、洗練された細目で伸びやかな線、筆先が開閉して変化し、運筆はよく活動して知性的、質朴で高雅な表現とされる。

曹全碑は曹全の徳政の称徳碑である。後漢の中平二年（一八五年）の刻。書法は「迥秀逸致、翩々」などと評され、字形の整齐さ、肉筆の風が忠実に刻された瑞々しい線質、抑揚のある運筆、流麗な波勢に特徴がある。八分の典型とされる一方で、婉美に過ぎると貶す評もある。

張遷碑は後漢中平三年（一八六年）の刻で、善政を布いた張遷の転任の記念碑である。書法は、古拙な線で点画を角張らせた険勁な書風であり、字形は縦長や方形のものが多い。波勢は力を込めて重厚につくつており、山東における八分の一典型とされる。清の伊秉綏や何紹基らに影響を与えた。

本稿では、これらの八分漢碑四種と熹平石經殘石の字形とを比較し、熹平石經殘石の正字の様相を確認するとともに、漢代を代表する漢碑の字形を、正字の視点から検討する。

表一 熹平石經殘石・漢碑字形比較表

高	王	為	文	年	家	孫	人	子	于	事	書写年代	碑石
高	王	為	文	年	家	孫	人	子	于	事	153	乙瑛
高	王	為	文	年	家	孫	人	子	于	事	156	礼器
高	王	為	文	年	家	孫	人	子	于	事	175	熹平殘石
高	王	為	文	年	家	孫	人	子	于	事	185	曹全
高	王	為	文	年	家	孫	人	子	于	事	186	張遷

二 熹平石經殘石と八分

漢碑四種の字形比較

本稿で使用する熹平石經殘石搨本（北京大学図書館所蔵）は一四行、一字全体が明瞭な文字は各行二二字（二六字、計三四八字である。このうち、乙瑛、礼器、曹全、張遷碑の四碑全てに字例がある文字を集字し、表Iを作成した。以下、表Iの各字を比較する。

「事」——熹平石經殘石の最長横画は「コ」形中の横画であり、縦画収筆は左方に曲がつて短く止めている。最長横画に関して熹平石經殘石と同様なのは曹全碑である。縦画収筆が近い形状をしているのは乙瑛碑である。曹全碑は、縦画収筆が他よりも極端に長い。総じて熹平石經殘石と最も近似の字形は乙瑛碑と言えよう。

「干」― 熹平石経残石の横画は、下方がやや長く、波磔はない。縦画から左への曲がりは、ゆったりとした角度で余裕があり、収筆は強い筆圧が加わって太くなり、急ブレーキをかけて止めている。熹平石経残石と概形が近いのは乙瑛碑、縦画曲がりの収筆は比較的礼器碑に近いと言えよう。曹全碑のみ横画末の波磔が顕著である。

「子」― 熹平石経残石の字形は、横画が縦画の高い位置で交わり、縦画下部の左方向への曲がりは、横画よりも長く書かれている。またその収筆は、「干」字と同様に筆圧を加えて徐々に太くなり、最大筆圧で急激に止まった書き方となっている。張遷碑を除く四碑は近似の字形である。

「人」― 画数が少なく、いずれも大差のない字形であるが、左払いにおける収筆の筆圧の込め方や、左払いと右払いの接点の位置などを見ると、乙瑛碑の字形が最も近い。

「孫」― 熹平石経残石の字形は、「子」と「系」の字幅の比率がおよそ一対二である点、また「系」上部の左払いの方向がほぼ水平な点の特徴である。それらの点から、比較的近似の字形を示すのは乙瑛碑と言えるだろう。張遷碑の字形は、偏と旁の距離が近いこと、「子」部分のそりの収筆が左上方向に向かっていることなどから、最も遠い字形を示している。

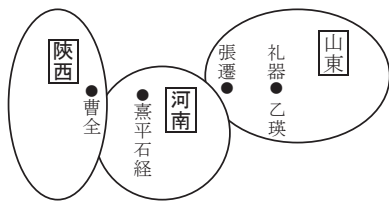
「冢」― 熹平石経残石の字形は、「冢」部分のそりが中央に位置している点、また左払い三本の先が次第に広がっていく点などが特徴である。最も近似の字形は乙瑛碑である。張遷碑の字形は、下部の湾曲したそりの画が左側に寄り、特殊な字形を示している。

「年」― 熹平石経残石の字形「年」は、最長横画の左上に短い横画が書かれていて、張遷碑の字形が同様である。乙瑛、礼器、曹

全碑は、波磔の右上にさらにもう一点が付されていて、熹平石経とは異なった字形である。波磔上の点が一点のもの、二点のものともに、漢碑や漢簡に頻繁に見られる。「年」は、もと篆書では「禾」と「千」を上下に組み合わせた「𦉰」形であり、張景造土牛碑「𦉰」や隸辨「𦉰」の字形に「禾」と「千」を読み取ることができ。これら「𦉰」や「𦉰」上半の「禾」部分の左右の払いが連続して書かれるうちに直線化して「𦉰」形となり、下部に「𦉰」が組み合わせ

わさって熹平石経残石の字形「𦉰」になると考えることができる。「文」― 熹平石経残石の字形は、横画の中央に点が書かれ、左払い・右払いの交差点は文字の中央（初画の点）の真下である。また左払いの方向は、四五度方向から徐々に水平方向となり、筆圧を加えて高く高い位置で収筆する。右払いは、左払いより低い位置まで重厚に書かれている。礼器碑の字形が最も近い。曹全碑の字形は、左払い、右払いの交差位置が非常に高く、右払い、左払いの収筆の高さが同程度である。張遷碑の字形は、初画の点が特に太く筆勢をもって右上にはねるように書かれている。また左はらいは真上にはね上げるような形になり、右払いは左払いと同程度の高さで、より太く重厚に右上に払い上げている。

「為」― 熹平石経残石の字形は、左払いは力を内に含むように収筆している。また「𦉰」右上の転折縦画の方向は、やや右下方に開いている。同部分について乙瑛、礼器碑は、横画から縦画へ転折する際に右上に持ちあがるような特殊な形をしている。総じて最も近似の字形を示すのは、曹全碑であろう。



「王」——熹平石經殘石の字形は、上部二横画が同じ長さであり、横画間の分間が均等である。上部の横画が同じ長さなのは乙瑛、張遷碑である。また、横画間の分間が均等なのは曹全、張遷碑である。張遷碑は波磔が判然としない。総じて最も近似の字形を示すのは、乙瑛碑である。

「高」——熹平石經殘石の字形は、上部横画に波磔があり、「上」の下は「口」に作っている。下部は「口」と「口」の下端が揃っている。乙瑛、張遷碑の字形は、いわゆる「はしご高」の「高」に作る。「高」字は五碑それぞれに特徴があるが、波磔を有し、その下を「口」に作る曹全碑を近似の字形に挙げる。

以上、表Iに取り上げた十一字種について、熹平石經殘石と八分漢碑四種との字形の比較を述べた。熹平石經殘石との近似性を指摘できたのは、乙瑛碑が六文字、礼器碑、曹全碑が三文字であった。刻年は、乙瑛碑一五三年、礼器碑一五六年、熹平石經一七五年、曹全碑一八五年、張遷碑一八六年であり、熹平石經殘石の字形は、それよりも以前に制作された乙瑛碑、礼器碑に近似性が高い傾向が見られた。

右上の略図は、これらの碑石が地理的にも比較的隣接する地域で作成されたことを示している。乙瑛碑、礼器碑は、熹平石經殘石のおよそ二十年前に同地域で作成され、刻年差も三年とほぼ同時期であることも影響しているのか、全体的に字形や書風が似通っている。一方、熹平石經より後に制作された曹全碑、張遷碑は、八分の一典

型でありながらより独自性を帯びているようである。

### 三 各字体の異同に関する考察

ここでは、一、二で挙げた八分漢碑四種中の一部に字例のある文字に焦点をあて、熹平石經殘石の字体との異同についてさらに考察する。図版の右に出典の略称を記す。

礼器 ◎熹平殘石 曹全 張遷 熹平石經殘石の「之」は、礼器碑と同様の字形で、波磔の斜画の書き出しに「筆押さえ」がある。曹全碑の字形にはそれは見られない。張遷碑の字形は、石鼓文「之」や説文「之」の名残りが感じられる古風・謹嚴な字形である。



礼器 ◎熹平殘石 曹全 張遷 熹平石經殘石の「其」は、上半閉鎖形内部を「十」に作っており、礼器碑の字形と同様である。戦国時代の秦國で作られたとされる大篆の石鼓文「其」や、説文「其」の同部分の「X」形が「十」に変化し、さらには「一」（張遷碑）に省略される流れが読み取れる。



礼器 ◎熹平殘石 曹全 張遷 熹平石經の「在」は、左払い



熹平石經の「在」は、左払い

に右下方向の短斜画が交差する形になっている。標準的な「在」字は曹全、張遷碑かと思われる。礼器碑の字形は、左払いに交差する縦画または斜画が見られない省略された形になっている。礼器碑と同様の字形を示す他の漢碑を挙げると、三老諱字忌日記「在」、孔

宙碑「在」などである。金文は「在」、説文は「在」、王羲之の草

書には「在」が見られる。左図のように、もと金文では肥筆だったものが、説文では短横画となり、熹平石経残石では短斜画となる。次に曹全、張遷碑のように縦画となり、さらには礼器、三老諱字忌日記、孔宙碑の省略された形となって、王羲之草書の字形に変遷していく過程を読み取ることができる。

「在」字の変遷



乙瑛 ◎熹平残石 曹全 張遷



熹平石経残石の左偏は「方」形であり、張遷碑の字形と同様である。一方、乙瑛、曹全碑は「在」の形である。説文

は「在」。隷書には「方」「在」ともによく見られるが、「在」の発生過程については判然とせず、今後引き続き検討したい。

礼器 ◎熹平残石 曹全 張遷 熹平石経残石のみ、上部が艸



冠となっているのに対し、礼器、曹全、張遷碑は、「上」の下に四点を付す形となっている。張遷碑には、「上」の下に二点を付す「𠄎」もある。金文は「𠄎」、説文は「𠄎」、懷素に「𠄎」、米芾に「𠄎」がある。上部が「艸」形の熹平石経残石は、金文以来の正統な字形で書いたものといえようか。「上」に「𠄎」を付す形の発生過程については今後引き続き検討したい。

乙瑛 ◎熹平残石 曹全



熹平石経残石上部は、「止」の省略形である。乙瑛、曹全碑の上部はさらに簡略化が進み、二点に横画の楷書字形と同様に作っている。説文古籀補「𠄎」、説文「𠄎」である。熹平石経残石は、西嶽華山廟碑「𠄎」の字形と同様である。隷書の「前」字の変遷を「𠄎」↓「𠄎」↓「𠄎」のようにたどることができ、熹平石経残石の字形は、この二番目の字形に近いことが分かる。

◎熹平残石 曹全 張遷



曹全、張遷碑は、「又」の上に一横画が見える。熹平石経残石は、その一横画が省略されているように見える。説文古籀補「𠄎」、説文「𠄎」、石鼓文「𠄎」。西域出土書跡に、一横画を短く省略した形の点を「又」の上に付したと見られる「𠄎」がある。

◎熹平殘石 曹全 張遷



曹全碑、熹平石經殘石、張遷碑の順に簡略化が進んでいると言える。三碑の上部はほぼ同じだが、下部に違いが見られる。「口」の中が、曹全碑は「日」、熹平石經殘石、張遷碑は「口」となり、さらに張遷碑は外側「口」の上横画が省略され、上部の横画と共用された形になっており、特殊である。説文は「𦵏」。

となり、さらに張遷碑は外側「口」の上横画が省略され、上部の横画と共用された形になっており、特殊である。説文は「𦵏」。

礼器 ◎熹平殘石 曹全



熹平石經殘石の左側下部「句」形は、礼器碑の左払いを横画へ直接連続した形に作っている。曹全碑の同部分には、「句」ではなく「回」となっており、特殊である。

説文古籀補「𦵏」、説文「敬」、隸辨「敬」、史晨碑「敬」である。

◎熹平殘石 曹全 張遷



説文古籀補「既」、説文「既」である。熹平石經殘石の右旁上部「无」は、説文古籀補の右旁上部の名残りを留めた形に作っている。熹平石經

殘石には、ほかに左下部に二点を加える「既」形もある。曹全碑、

張遷碑の同部分「无」は省略形である。

乙瑛 ◎熹平殘石 曹全



熹平石經殘石は、乙瑛碑の字形とほぼ同様である。曹全碑の字形は、中央の縦画が「コ」形を挟んで上下に分かれている。説文古籀補「臣」、説文「臣」。篆書では中央の縦画が

「コ」形を貫いてはいない。史晨碑に曹全碑と同様の字体「臣」がある。史晨碑は乙瑛碑と同地域の書跡で、一六九年の刻。时期的には、乙瑛碑（一五三年）と熹平石經殘石（一七五年）の間で、両者と異なる「臣」形も書かれていたということになる。

◎熹平殘石 曹全 張遷



熹平石經殘石は、艸冠が左右に分かれた形に作られ、下部の二縦画が「L」状の折れになっている。曹全碑は、艸冠が省略された字形である。張遷碑は、艸冠が草書の字

形と近い形になっている。説文「𦵏」、孔宙碑「𦵏」、西嶽華山廟碑「荒」があり、熹平石經殘石の字形は、西嶽華山廟碑の字形に近い。

◎熹平殘石 曹全 張遷



張遷碑のしんによは、上部の点が二点に省略された形といえる。前の「荒」字の艸冠にも草書のような省

略形が見られたように、張遷碑は、省略の進んだ字形が一部に見られるが、それを特徴と位置づけるには、さらに多くの事例を確認する必要があることは言うまでもない。傍の下部が、熹平石経残石は「己」、曹全碑は「ふしづくり」形、張遷碑は「巳」になっている点  
が異なる。説文古籀補「𠄎」、説文「𠄎」、隸辨「𠄎、𠄎、𠄎、𠄎」、楷書に龔龍顔碑「𠄎」、九成宮醴泉銘「𠄎」、楮遂良「𠄎」などがあり、傍の下部には多様な形が見られる。

◎熹平残石 曹全



熹平石経残石と曹全碑の字形の違いは、右下部である。熹平石経残石は「小」形、曹全碑は「灬」となっている。説文「僚」、隸辨「僚、僚」、小子残碑「僚」。説文の字形から、「僚」字の右下部はもと「火」であり、熹平石経残石では「小」に、曹全碑では「灬」に変化している。

◎熹平残石 曹全



熹平石経残石の「冂」内は、説文古籀補「商」、西嶽華山廟碑「商」、隸辨「商」とほぼ同様の字形のように見受けられる。曹全碑の字形は、

である。

◎熹平残石 曹全

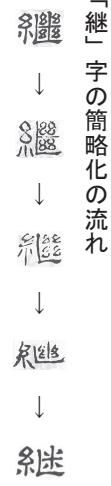


熹平石経残石は「惠」形、曹全碑は「惠」形に作られている。説文古籀補「惠」、西嶽華山廟碑「惠」（二六五年）、西狭頌「惠」（二七一年）などの例からは、隸書時代のある時期に、「惠」と「惠」の明確な使用の  
分断は見られない。

◎熹平残石 曹全



説文古籀補「繼」、説文「繼」、隸辨「繼、繼、繼、繼、繼」、西狭頌「繼」、石門頌「繼」。熹平石経残石は、説文の字形とほぼ同様に書かれており、西狭頌にも同形が見られる。これらの字例から、「繼」から「繼」へのおよその簡略化の過程を次のようにたどることができる。



◎熹平残石 曹全



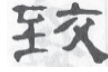
説文古籀補「聽」、説文「聽」、隸辨「聽、聽、聽、聽」。熹平石経残石は、説文の字形の流れを受け継ぎ、「耳」下部



が「壬」につくられる隸辨一番目の字例とほぼ同様である。曹全碑は、「耳」下部の「壬」が「土」となる隸辨二番目の字例と同様である。

◎熹平残石 曹全

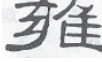
説文「致」、隸辨「致、致、致、致、致、致、致」



孔宙碑「致」、西嶽華山廟碑「致」。熹平石経残石は、隸辨第一番目の字例と同様と考えられる。曹全碑の字例は、西嶽華山廟碑の字形と同様である。

◎熹平残石 曹全

説文「雍」、隸辨「雍、雍、雍、雍、雍、雍、雍」



陽詢「雍」、虞世南「雍」。熹平石経残石は「上」が下部の全体を覆っているのに対し、曹全碑は「上」が左偏のみに被さった形となっている。隸辨および楷書の歐陽詢、虞世南の字例にも、両者が見られる。

以上、本項では、八分漢碑四種中の一部に字例のある文字に焦点をあて、熹平石経残石の字体との異同について考察した。その結果を次のようにまとめることができる。

- ① 「之」(之) 熹平石経残石、(之) 礼器碑、また「其」(其) 熹平

石経残石、(其) 礼器碑)のように、熹平石経残石と礼器碑の二

碑に特徴的な共通点が見られた。

- ② 「舊」字において、熹平石経残石のみに見られる小篆の流れをくむ字体「舊」が見られた。

- ③ 張遷碑には、「也(之)」のように、石鼓文や説文などの篆書

の名残りがあつた古風・謹嚴な字体と、「舊(舊)」、「荒(荒)」、「遷(遷)」など簡略的な字体が見られる。

- ④ 曹全碑には、「前」「荒」「僚」「恵」「繼」のように、熹平石経残石の字体に比べて簡略な字体で書かれている例が見られた。

四 おわりに

本稿では、後漢熹平四年(一七五年)、経年や秦代の焚書坑儒によつて散逸した儒学經典の古来の原文を回復させ、後学の益となるよう刻石された「熹平石経」の残石搨本に焦点をあてた。当時の正体の隸書字形を示す「熹平石経残石」の文字と、同時代に建碑された乙瑛碑、礼器碑、曹全碑、張遷碑の四碑の字形とを比較検討し、共通点や相違点について考察した。また隸書の代表的古典と尊称されるそれら四種の価値を、筆意のみならず正体の視点からも確認することを目的とした。

二においてはまず、熹平石経残石と八分漢碑四種の全てに字例のある文字を抜粋して表Ⅰを作成した。そして表Ⅰをもとに、字体や

書風の微細な異同等を考察し、熹平石経残石と八分漢碑四種との共通点や相違点を見出そうとした。その結果、熹平石経残石と乙瑛碑との間に比較的顕著な字体・書風の共通点が見られた。

三においては、八分漢碑四種中の一部に熹平石経残石と同じ字種の字例がある文字のうち、熹平石経残石との字体の異同が顕著なものを取り上げて考察した。字体の比較においては、文字の正統の流れがたどれるよう、説文の字形や他の隸書古典の字例も示した。結果は先述したとおりである。

本稿全体を通して、熹平石経残石の字体は、本石経が儒学経典古来の正文を記すことのみならず、文字（隸書・八分）の正体をも記す意図のもとに制作されたことを如実に示し、およそ金文や小篆の流れを汲む正統的な字体によつて書かれていることが分かった。また、本稿で取り上げた漢代を代表する八分漢碑四種のうち、礼器碑、乙瑛碑には熹平石経残石との共通点が比較的多く見られ、字体の正統的性格が強いと言えよう。一方、熹平石経以後に建てられた曹全碑や張遷碑には、簡略な字体と考えられる形状に書かれている字例も見られた。熹平石経残石の字体に、それよりも先に書かれた乙瑛碑や礼器碑との共通点が比較的多く見られるのは、隣接地域における政治的、文化的交流の所産とも考えられるが、その点については稿を改めて、多角的に詳細な検討を行う必要がある。

## 図版出典

本稿中の文字図版は、次の書籍から抜粋、転載した。

- ・ 劉正成『中国書法全集 第八卷』一九九三年 榮寶齋
- ・ 伏見沖敬『角川書道字典』一九七七年 角川書店

- ・ 藤原鶴来『新書道字典』一九八五年 二玄社
- ・ 赤井清美『篆隸字典』昭和六〇年

<sup>1</sup> 劉正成主編『中国書法全集 第八卷』榮寶齋 一九九三年 四八五頁  
<sup>2</sup> 劉正成主編『中国書法全集 第八卷』榮寶齋 一九九三年 四八七頁